

勝林寺夕報



仏光測量なきゆえに
難思光仏となつたり
諸仏は往生嘆じつ、
弥陀の功徳を称せしむ

阿彌陀如来さまというほとけさまの不可思議なお徳を、お釈迦さまは、たくさんのお釈迦さまといつしよに、説きつづけ讃えつづけられるのです。

いまにもお亡くなりになろうとするお釈迦さまが、いわばこの世の名残りに、説いてみてもそのころが通じることかどうかと案じながら、それでも是非とも是非とも言い遺しておかねばとお説きくださったのが「阿彌陀経」というご説法でありました。

その「阿彌陀経」に、如来さまのおみのりを「一切世間 難信の法」といつておられます。それほど測り知ることのできなない大きな大きな光のほとけさまが阿彌陀如来さまなのだよとお釈迦さまは讃えられているのです。

「難思光仏」というよび名は、そういう意味でつけられた、阿彌陀如来さまの十番目のお名前です。(無量光仏・無辺光仏・無碍光仏などと正信偈にも今まで読んできたご和讃にもうたわれておりました)

「難思光仏」―「思う」という字の意味を辞典を引いてしらべてみました。
「思」は子どもの小さなあたまたまのかたちです。ですから、「思う」というのは、私たちの小さな頭のなかで考えるということのことです。
また「思う」の

「田」は、田圃の区画(吟略の意)のことで

ここからこつちは私の―というふうな縄張りをすることです。
ですから、「思う」は、縄張りをした考えのことです。

ほんとに、私たちの考えや思いというものは、自分ではひとかどのように思っていますもの、実は、小さな、しかも自分勝手なワク・縄張り・尺度のなかでしか考えていないのではないでしようか。

そんな得手勝手な小さな我執の思いやはからいでは、とうてい如来さまを見ることも拝むこともむずかしいのでしよう。

とくにこのころ、私たち、「科学」という目を通してしかものが見えないように習慣づけられてしまつておられます。

ものごとを何でも彼でも、数と量で測つて、それでもののねうちを決めようとして、おかねの量、労働の量などもののねうちを決めます。

医療検査の機械のうえに出た数値で、人のからだやこころのねうちを計ろうとします。
精子・卵子の結合数量を操作して、勝手に男女のいのちを造り分けようとしています。

プラグマチズム・実用主義・計量主義・統計主義・科学主義が生み出す人間疎外(人間がつくり出したものによつてかえつて人間がつぶされてしまう)の状況がおこりつゝあります。

「数」・「量」というものは一体何なのか。
「科学」は絶対なのかということ、考えてみなければなりません。

「0」(ゼロ)というものがありません。
0は、なにもないことではありません。0があるから数があるのです。0は無限に数を生んでいくのです。

仏教では、「空」(クウ)ということと言います。
何もないからつぼではありません。
「空」は「縁起」(すべてのものを、そのようにならしめていること)だといわれています。

また「縁起を見るものは法(真理)を見る」とも「縁起を見るものは如来を見る」とも言われています。

おられます。
むずかしいことではありますが、大胆にたえていいと、これだけだ。これほどだと、数や量にあらわせないのがあるから、だから数や量がうまれるのでしよう。

数や量というものは、これだけだ。これほどだなどと数値では現しえない0の世界のなかにいる私たちが、私たちの思いのなかで、はからい、分別し、約束して、これは1、これは2という具合に区分区画して決めているのが数や量だと思えます。

私たちはひよつとすると、私たちの頭や思いではとうてい数えることも量することもできない大きないのち(「難思光仏」)のなかにありながら、それを知らないままに、小さな思いや判断で、これは1これは2、これは私あれば彼、これは善あれば悪、などと、数で比較し量で競争して、あさましい日ぐらしをしているのではないでしようか。

科学の世界でも、数や量ですべてをはかるのはなしに、むしろ、数や量をなしたとせいでいるのを考えなおすことをしなければ、数と量とで世界はつぶされてしまうかも知れません。

私たちの日ぐらしも、もちろん多い少ない高い低い遠い近い美しい醜い強い弱いなどという数量のくらしをやるわけにはいかないまでも、人のほんとうのしあわせは、実はそんな数を競いあい量で争いあつて得られるものではない。そうではなくて、数や量では「測量」できない・私の小さな頭では考えられない・私の身勝手な我執の判断ではは握できない大きな大きな真実の光。

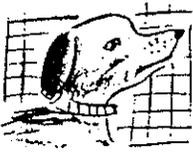
この対立のあさましい私をそのままつゝんで、「ここを依り処にして、ほんとのいのちを生きたのだ」とよんでくださる如来さま。

親鸞さまは、その如来さまのよび声を「ナモアミダブツ」と聞きとつて

仏光測量なきゆえに
難思光仏となつたり
諸仏は往生嘆じつ、
弥陀の功徳を称せしむ

と、真の依り処をえたいのちのよるこびをおうたくなるのです。

(来月に続く)



善いことをして
人のことに腹が立つようでは
善いことをしたとはいえない

八月のこよみ

- 一日 茶幹運動本部専門部会(本山)
- 二日 若松子ども会(本堂寺)
- 三日 出石組「連研」(尊徳寺)
- 四日 瑞泉寺「いちよふ会」(広島)
- 五日 兵庫教区企画委員会・田中清隆氏宅法事
- 七日 教森 昭氏建碑式・宮崎清志氏宅法事 正法寺追悼会・山田 豊氏宅初盆
- 八日 坪木勢逸氏宅建碑式
- 九日 滋賀教区稲枝寛和仏師研修会
- 十日 森井治郎氏宅初盆
- 十一日 谷屋 茂氏宅建碑式・斎藤清志氏宅初盆 南嶺白氏宅初盆
- 十二日 永井誠一氏宅初盆・出石町内盆参り
- 十三日 中島明美氏宅法事・坂本孝行氏宅法事
- 十四日 奥地泰治氏宅法事・坪木勢逸氏宅法事
- 十五日 宮崎幸彦氏宅初盆・藤山和子氏宅法事
- 十六日 福富 櫻氏宅法事・横山弘三氏宅法事
- 十七日 勝林寺子ども会研修旅行
- 十九日 住職「十日講」(勝林寺)
- 二十日 教森 昭氏宅法事・但丹ブロック仏師研修会(光行寺。「みのりを聞く会」)
- 二十四日 二十五・三十日 布教使研修会(本山)
- 三十一日 出石組総代研修会(善立寺)・岡山ブロック仏師研修会

「子ども研修旅行」

「勝林寺子ども研修会」をはじめから二十年になります。今年はお本山へお参りします。

まだ少しバスの余裕があります。仏師評議員を通じてお申込ください。
追加募集



私のお念仏

仏壯 宮嶋 千秋



この世のなかで、私が役に立ち必要であるといつてもえらるところがどこにあるのだろう。今そんなことを、ふと思うのです。おそろく世界中で、また国中どこにもないように思います。

いてもいなくてもよいのです。わが家ではどうでしょう。口には出しませんが、私がおればこそと自分では思い、それらしきことを口にするのもごさいですが、いなければいよいよに過すのではないかと、思います。

しかし、いるとかいないとか、必要とかいらぬものとか、役立つかいらん者とかいうようなことにかゝわらず、それとは別なところで人というものは、不思議な強い太い大きい愛情とご縁とのつながりで、かゝわりあえていられるのではないかと、思います。

むしろそうした、目に見えないところで、強く強く結ばれているように思い、もつたないことだと思わせたように、おいておきます。

いまこそそういうもつたないご縁のなかの一日一日を「生ききれてこそ、死にきれる」ような生きかたを積み重ねていきたいものだ、心には言いかかせてはいるのですが、しかし現実の私は、それに逆らうような行動を積み重ねるようになっていきます。

昨日は、一生のあいだ、働き働きつづけられた隣家のお婆さんが、晩年はよいお世話をしてもらいながら、しずかに世を去られました。

このお婆さんは、お歳も宗祖親鸞さまと同年の九十歳。ちやんとわがいのちの帰るべきところを見ずえて、そこ（お浄土）へ、ねむりに就くが如く帰つていかれたのです。まさに「生ききれてこそ、死にきれた」かただと思えます。

また、みほとけのお慈悲のなかへ帰れるというめあてが見えていたればこそ、あんなに一日一日

を、しつかりと生きて働いておられたのだと思わずにはおれませんが、前のごとばと対句に、「死にきれてこそ、生きられる」ということばが、勝林寺の掲示にございました。

実は私、何のことも心に合点のいかぬままにうち過ぎていきましたが、突然ハッと気づかせていただくことができました。隣のお婆さんの死でありました。

私もずいぶんお世話になり、私といつしよに暮こんでくださり悲しんでくださり、また励ましてくださったお婆さんでした。

私にとつては、これからは、お婆さんとの本当の出会いが始まるのだと思います。

このお婆さんのかゝりてくださった「おみのりの燈」は、私のころのなかでいつまでも燃えつづけることをごさいます。

くいの残らない、このすがすがしいお婆さんの生きさまを、私もなんとか受け継がせていきたいという気もちで、いまお念仏申すのでございます。

南無阿弥陀仏。

一年生の詩

一年生のTインの詩です。（「朝日新聞」）

ぼくが生まれたとき

おとうさんが
おとこでよかつたといいました。
おとうさんが
おとうさんが

おんなでよかつたといいました。
おんなでよかつたといいました。

あつて、
かな子がしにました。

おとこでも、おんなでも
おんきなならいいといいました。

科学や医術が発達して、おとうさんが願った通りに、男の子を産むこともできるようになりました。

もつと技術が発達して、おかあさんの思い通りに、女の子をつくることができました。

今では、子どもは「めぐまれる」ものではなく、父と母とで相談して、あるいはお医者さまが造り出せるものになったのでしょうか。

今では、人のいのちは、科学で、どのようにでも勝手にあやつられるものになったのでしょうか。

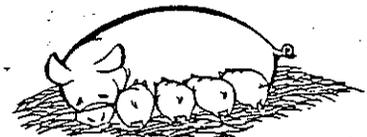
願ひ通り、計画通りに、男の子と女の子とが産まれたとき、「しめた」とおとうさんとおかあさんはよろこんだのです。

でも、その計画通りにつくった女の子「かな子ちゃん」が、思いもよらず死んでしまいました。

計算違い。計画はずれに、父と母とは出会いました。

計画通りではない計算通りにはいかない。いのちの不思議さ。い出会わなければならなかったのです。

父と母とは、なにか、いのちに対して大変な思いあがりがあるにあらうたのだということを思ったにちがひありません。



こんど
たかしが生まれたとき
おとうさんも、おかあさんも
おとこでも、おんなでも
げんきなならいいといいました。

おとうさんおかあさんは今度、もつたない子どもを恵まれました。

（勝林寺テレホン法話）

しそジュース

材料
水 十カップ（約一升）、クエン酸三十g
しその葉 三百g 砂糖 一。五t

作り方
まず十カップの水を沸騰させクエン酸をとかす。次に赤シソの葉が青くなるまで煮つめる。

色が変ればシソの葉を引き上げ、砂糖を入れよく混ぜて、こす。よく消毒したビンに入れて保存。

四〜五倍に水でうすめ夏はコールド、冬はホット。お好みでウイスキーやレモンをたらしてもよし。

ゴマ入りせんべ

材料
強力粉 八十g 薄力粉 百g 白ごま 二五g
二五g 砂糖 四十g 塩 小さじ一杯

作り方
① 右記の材料を混ぜ合わせる。② 七十Cのぬるま湯で、ポタポタ落しながら手でかき混ぜ米粉状から小梅くらいになつたら、手で十分間ほど力を入れてこねる。

③ このネタを二分し直徑四センチ程の棒状まのサララップにまつちりくるみ一時間寝かせる。④ 厚さ五ミリの輪切りにする。⑤ 打粉をした板の上でめん棒です。⑥ 百六十度くらいの温度の油で揚げ、キツネ色になつたところできり出す。

